「フィッチャーの鳥」のテクスト変遷

―『グリム童話集』『グリム童話選集』のテクスト分析―

間宮　史子

序論

『グリム童話集』（以下『童話集』）には、五〇話を収めた『グリム童話選集』（以下『選集』）がある。『選集』は子どものために編まれ、子どもたちの支持を受けて版を重ね、グリム童話の普及に大きく寄与した。グリム兄弟生前に、『童話集』が七版を数えたのに対し、『選集』は一〇版を数えた。[1] グリムが『童話集』の改版のたびに話のテクストに手を加えていったことは知られているが、『選集』に収められた話についても、やはり手を入れていることがわかっている。私は、『選集』に収められた話のテクスト変遷を明らかにしようと、これまでに、「灰かぶり」（KHM二一）、「赤ずきん」（KHM二六）、「いばら姫」（KHM五〇）、「貧しい粉屋の小僧と猫」（KHM一〇六）を調査したが、[2] グリムの改訂の仕方は話によって異なっている。本稿では「フィッチャーの鳥」のテクスト変遷を扱う。

「フィッチャーの鳥」は、一八一二年の『童話集』初版第一巻に四六番として収められた。フリーデリケ・マンネルとドルトヒェン・ヴィルトが語った話を合成したものである。[3] 初版以降『童話集』では変わらず四六番で、一八二五年に初版が刊行された『選集』では二二番となる。そこで本稿では、『童話集』初版（一八一二）を起点として、『童話集』第七版（一八五七）までの各版、および『選集』初版（一八二五）から第一〇版（一八五八）までの各版[4]の、合わせて一六版について、「フィッチャーの鳥」のテクストを比較検討していくことにする。

本論

「フィッチャーの鳥」を一七段落に分け、『童話集』『選集』各版の同じ段落を出版年順に並べて比較し、[5] その結果をもとにテクスト変遷図を作成した。その際テクスト各版は、『童話

集』『選集』をそれぞれ、ドイツ語のGroße Ausgabe、Kleine Ausgabeの頭文字G、Kであらわし、第何版かをその次にくる漢数字であらわした。さらに本文中では必要に応じて、出版年の下二桁を（ ）内に示す。つまり、一八一二年刊行の『童話集』初版はG一（一二）、一八二五年の『選集』初版はK一（二五）ということになる。各段落のテクスト変遷図を示す。

以下、段落ごとに、まず起点となるG一（一二）のテクストを示し、めだって変更のある部分を主に指摘していく。すべて拙訳である。句読点や表記のしかたの変更、個々のことばや語順の変更など、訳すとほとんど変わらないところは、紙数の都合で割愛する。

話の題名「フィッチャーの鳥」は、全版を通して変わらない。

［第一段落］

G一（一二）「むかしむかし、あるところに魔術師がいた。この魔術師は泥棒で、貧しい男の身なりをしては、家いえをたずね歩き、物乞いをした」。非常に簡潔である。

G二（一九）になると、「泥棒で」は削除され、文末に「（物乞いをし）ては、美しい娘たちをつかまえていった。魔術師がその娘たちをどこへ連れていくのか、誰にもわからなかった。なにしろ、娘たちは二度と戻ってこなかったからである」が加筆される。

このテクストが、変更されずにG六（五〇）・K八（五〇）まで保たれる。K九（五三）で一か所、副詞「二度と～ない」が変更され、それがG七（五七）とK一〇（五八）に引き継がれる。つまり第一段落では、同年に出版されたG六とK八、G、Kの最終版であるG七とK一〇のテクストは同一である。

［第二段落］

G一（一二）「すると、ひとりの娘が一切れのパンを持って戸口に出てきた。魔術師が娘に少し触れると、娘は魔術師のしょいかごのなかに飛びこんでしまった。それから魔術師は、娘をかつぎ去り、自分の住処へ連れていった。そこは、なにもかもぜいたくにできていて、魔術師は娘が欲しがるものをなんでも与えた」

このテクストは、G二（一九）で加筆・変更されて膨らむ。まず冒頭に、魔術師が美しい三人娘のいる家にやってきて物乞いする様子が加えられ、「さて魔術師はあるときまた、三人の美しい娘のいる男の戸口に、貧しい弱った物乞いの姿でやってきた。背中には施し物を集めようとするかのように、しょいかごを背負っていた。魔術師は、食べ物を少し恵んでくださいと頼んだ」となる。出てくるのは、G一では「ひとりの娘」であったが、ここでははっきりと「一番上の娘」と語られる。魔術師が娘を連れ去る部分には、「力強い足取りで」「森を通り抜けて」が挿入される。さらに最後に、魔術師が娘に欲しがるものをなんでも与えて言うせりふ「わしのところにいると居心地がいいだろう。おまえが欲しいと思うものは、[6]なんでもあるからな」

が加筆される。

K一（二五）はG二と同文。K二（三三）で少し変更され、「森を通り抜けて」は「暗い森を通って」となる。このテクストは、K三（三六）とK四（三九）に引き継がれる。ところが、G三（三七）では動詞がひとつ書き加えられ、G四（四〇）でも僅かな変更があるので、K四はG三ともG四とも同一ではない。G四のテクストは、G五（四三）、K六（四四）、K七（四七）と変わらず保たれる。

K八（五〇）で、魔術師が娘を連れ去る部分に動詞がひとつ加えられる。ところが、同年に出版されたG六（五〇）はK八と同一ではない。K八でなされた動詞の追加に加えて、冒頭の文が変更され、「ある日魔術師は、貧しい弱った物乞いの姿で、三人の美しい娘のいる男の戸口に現れた」となる。この変更は、G七（五七）には引き継がれるが、K九（五三）には引き継がれない。K九において、さらに変更と加筆がされる。たとえば、「暗い森を通って自分の住処へ」は「暗い森のまん中にある自分の住処に」となり、関係節で家の場所が説明される。また、魔術師のせりふに、娘への呼びかけ「なあ、おまえ」が挿入される。K一〇（五八）はK九と同文。けれどもG七は、K九での変更を引き継いでいる反面、冒頭部分はG六での変更を受けているので、G七とK一〇は同一ではない。

［第三段落］

G一（一二）「その後あるとき、魔術師が言った『わしは、よそですることがあるので、どうしても旅にでなければならない。ここに、卵がひとつある。これを大事にとっておいて、肌身離さず持っていろ。それから、ここに鍵がひとつある。だが、この鍵の合う部屋には入ってはならん。命にかかわるからな』」

これが、G二（一九）でやはり変更される。「その後あるとき」が「二、三日たつと」と書き換えられ、魔術師のせりふが改筆されて膨らむ。まず、冒頭は「わしは、旅にでなければならない。おまえをしばらくひとりにしておく」となる。娘に対する禁令は、G一では、鍵をひとつ渡し「この鍵の合う部屋には入ってはならん」だったが、ここでは複数の鍵を渡し「おまえはどこでも歩きまわって、なにを見てもいい」、だが「この小さな鍵の合う部屋にだけは入ってはならん。それは禁じる。命にかかわるからな」となる。そして、「卵を大事にとっておけ、むしろ肌身離さず持っていたほうがいい」ことの理由が「もし卵がなくなれば、大変な不幸になるだろうからな」と加えられる。さらに段落の最後に、娘が鍵と卵を受け取り、言われたとおりにすると約束したことが加筆されている。

K一（二五）はG二と同文。K二（三三）で再び少し変更される。「ここに、卵がひとつある」という魔術師のせりふが、「さらに、魔術師は娘に卵をひとつ与えて、言った」と魔術師の行為として地の文で語られるようになる。また、最後のせりふ「もし卵がなくなれば、大変な不幸になるだろうからな」が、より仰々しい表現でいい換えられる。

このテクストは、K三（三六）、G三（三七）、K四（三九）と保たれる。G四（四〇）で動詞がひとつ変更されるが、それ以降G六（五〇）・K八（五〇）まで変わらない。K九（五三）に至って、「どこでも歩きまわって、なにを見てもいい」を「どこでも行って、なにを見て楽しんでもいい」とするなど、少し変更される。G七（五七）とK一〇（五八）はK九と同文。

［第四段落］

G一（一二）「けれども、魔術師がでかけてしまうと、娘はそこへいって、部屋を開けてしまった」。非常に簡潔なこのテクストは、G二（一九）では「魔術師がでかけてしまうと、娘は好奇心をおさえることができず、家じゅうを見てしまうと、あの禁じられた扉のところへも行って、扉を開けた」となる。娘が好奇心をおさえることができなかったこと、まず家じゅうを見たことが書き加えられ、「あの禁じられた扉のところへ」と、はっきり娘の行き先をいうようになる。

このテクストがほとんど変わらず、K一（二五）、K二（三三）、K三（三六）、G三（三七）、K四（三九）と保たれるが、G四（四〇）で娘が家を見た様子が「下から上まで」と加えられる。その後、G五（四三）、K六（四四）と変更はないが、K七（四七）で動詞がひとつ変更され、娘は「家じゅうを下から上までくまなく見てしまうと」となる。このテクストはG六（五〇）・K八（五〇）に保たれるが、K九（五三）でめだった加筆と書き換えがされ、次のようになる。

「魔術師がでかけてしまうと、娘は家の中を下から上まで歩きまわって、あらゆるものを見た。部屋という部屋は、銀と金で輝いており、娘は今までにこんな豪華なものは見たことがないと思った。とうとう娘は、あの禁じられた扉のところへも来た。娘は通り過ぎようとしたが、好奇心にかられて落ち着かなくなった。娘は鍵を見た。鍵は他の鍵と同じようだった。娘は鍵を差し込んで、ほんの少し回した。すると扉が勢いよく開いた」

部屋の様子、娘の心の動き、娘が鍵で部屋を開ける様子、つまり、状況描写が加筆されている。このテクストが、G七（五七）とK一〇（五八）に同様に引き継がれている。

［第五段落］

G一（一二）「部屋の中へ足を踏み入れてみると、部屋のまん中には大きな盥があり、その中には、切り刻まれた死人がいくつも横たわっていた。娘はぎょうてんして、手に持っていた卵をその中へ落としてしまった。すぐに卵を取りだして、血を拭きとったが、すぐにまた血が現れる。娘がどんなに洗ってみたり、こすってみたりしても、血をすっかり落とすことはできなかった」

このテクストがG二（一九）で加筆・変更される。冒頭に語り手が登場し、「ところが、娘はどんなに驚いたことか」という文が入る。また、「大きな盥」に「血まみれの」という形容詞が加えられ、娘が卵の血を拭きとろうとする部分は、「拭きとっ

たが、どうしてもだめだった、なぜならすぐにまた血が（…）」としている。

このテクストが、G六（五〇）・K八（五〇）まで保持される。けれども、K九（五三）でまた、加筆・変更がある。冒頭の文が「ところが、娘は何を目にしたことか」と書き換えられ、死人の入った大きな血まみれの盥のあとに「そのそばには木の台があり、その上にはぴかぴか光る斧が載っていた」と、殺害道具が加筆されている。また、「（拭きとったが）どうしてもだめだった、なぜなら」を「無駄だった」とする。G七（五七）とK一〇（五八）のテクストは、K九と同一である。

［第六段落］

G一（一二）「魔術師は帰ってくると、卵と鍵を返せと言った。魔術師はそれを見て、娘があの血の部屋に入ったことがわかった。『おまえは、わしの言うことをきかなかった』と魔術師はおこって言った『今度はおまえが、否応なしにあの部屋に入らなければならない』そう言うと、魔術師は娘をつかまえ、連れていって、切り刻んだ。それから、娘の死体を、ほかの死体が入っている盥の中へ投げこんだ」

このテクストが、やはりG二（一九）で変更される。冒頭の文は「まもなく、魔術師が旅から帰ってきて言った『さあ、鍵と卵を返しなさい』」となり、G一で間接話法であったところが直接話法に書き換えられる。特にめだつのは、魔術師の恐ろしさを強調する次の三か所の加筆である。魔術師に鍵と卵を返せと言われたあと、「娘は震えながらそれを魔術師に渡した」、また、魔術師のせりふに「おまえの命はこれで終わりだ」という娘への死の宣告が挿入される。さらに、魔術師が「娘をつかまえ、部屋へ連れていって、切り刻んだ」あとに「それで娘の赤い血が床に流れた」という文が書き加えられている。

これがK一（二五）を経て、K二（三三）でいくらか変更される。たとえば、G二で直接話法にいい換えた「（帰ってきて）言った『さあ、鍵と卵を返しなさい』」を「最初に鍵と卵を返すように求めた」と、再び地の文に書き換えている。このテクストが以降、K六（四四）まで保たれる。K七（四七）でまたわずかな変更が認められ、続くK八（五〇）にはそのテクストが引き継がれている。ところが、G六（五〇）のテクストはK八と同じではない。「そう言ったかと思うと、魔術師は娘をつかまえ、部屋へ連れていって」という部分が「魔術師は娘の髪をつかんで引きずり込み」となっている。

K九（五三）において、テクストにはさらに変更・加筆がなされる。たとえば、娘が血の部屋に入ったとわかるところに「赤いしみを見てすぐに」が加えられる。また、K八で「そう言ったかと思うと、魔術師は娘をつかまえ、部屋へ連れていって」、G六で「魔術師は娘の髪をつかんで引きずり込み」となっていた部分は、「魔術師は娘を突き倒し、髪をもって引きずり」となる。そしてこの直後に「娘の頭を台の上で切り落とした」という文が加えられる。この加筆は、第五段落でもやはりK九で

なされた殺害道具の加筆を受けてのものである。魔術師の行為がより乱暴に書き換えられていくのがわかる。K九のテクストはそのままK一〇（五八）に引き継がれるが、G七（五七）では副詞と形容詞がひとつずつ削除されているため、G七とK一〇のテクストは同一ではない。

［第七段落］

G一（一二）「しばらくすると、魔術師はまた物乞いにでかけていき、その家から二番目の娘をつかまえてきた。二番目の娘も、一番目の娘と同じように、開けてはいけないといわれた、あの扉を開け、卵を血のなかに落とした。そして、切り刻まれ、一番目の娘の死体が入っている盥の中へ投げこまれた」

G二（一九）において、全体的に書き換え・加筆がされる。「『どれ、こんどは二番目のを連れてくるか』と、魔術師は言って、また貧しい男の姿をして、その家へでかけていき、物乞いをした。すると、二番目の娘がパンを一切れ持ってきてくれた。魔術師は、一番目の娘のときと同じように、ほんの少し触れただけで娘をつかまえ、住処へ連れ帰り、娘が中をのぞいてしまったので、あの血の部屋で殺してしまった」

このテクストが以降、K六（四四）まで保持される。K七（四七）で、最後の部分が「娘も魔術師のしかけたわなにかかって、あの血の部屋をのぞき、魔術師が帰ると、命でそれをあがなわなければならなかった」という表現になる。続くK八（五〇）はK七と同文。ところがG六（五〇）では、この部分が「娘も姉と同じことになり、好奇心にそそのかされて、あの血の部屋を開けて中をのぞき（…）」となる。「好奇心にそそのかされて」という内的動機が、娘が部屋を開けた理由として加えられる。

K九（五三）には、K八からのテクストとG六でなされた変更の両者が認められ、さらにいくらか変更されている。K一〇（五八）はK九と同文。ところがG七（五七）は、G六からのテクストとK九でなされた変更の両者を引き継いでいるので、G七とK一〇のテクストは同一ではない。

［第八段落］

G一（一二）「それから魔術師は、三番目の娘も連れてこようと思った。同じようにして、しょいかごに入れて、住処へ連れ帰る。そして、でかけるときに、卵と鍵を渡す。ところが、末娘は賢くて知恵があった。末娘はまず卵をしまいこんで、それから、あの秘密の部屋に入っていった」

G二（一九）で全体に渡って改筆される。「それから魔術師は、三番目の娘をつかまえに行き、同じように連れてきた。ところが、末娘は賢くて知恵があった。魔術師が末娘に鍵と卵を渡して旅にでてしまうと、末娘はまず、卵をしまいこんで鍵をし、それから、あの禁じられた部屋に入っていった」

このテクストが、ほとんど変わらずにK七（四七）まで保たれる。K八（五〇）でいくらか変更される。末娘が卵をしまうところが「卵を箱に入れて、その箱に鍵をかけ」となる。とこ

ろが、この表現はK八のみでみられ、G六（五〇）では「卵をきちんとしまい」となっている。G六のこの変更はK九（五三）に引き継がれ、K九ではさらに加筆がされ、末娘が「家の中を見てから、最後に」禁じられた部屋へ行くことにしている。K一〇（五八）はK九と同文だが、G七（五七）は、G六からのテクストとK九でなされた変更の両者を引き継いでいるので、G七とK一〇のテクストは異なる。

［第九段落］

G一（一二）「末娘は、血まみれの盥の中にふたりの姉を見つけると、身体を全部さがし集めて、頭、胴体、腕、足と、ちゃんと並べなおす。すると、それぞれの部分が動きはじめて互いにくっつき、ふたりはまた生き返る。そこで末娘は、ふたりを連れだして隠した」

このテクストが、G二（一九）で加筆・変更される。まず、冒頭に語り手が登場し、「ああ、末娘はなにを見たことか！」という感嘆文が挿入され、続く文は「ふたりの愛する姉が惨めに殺されて、盥の中に横たわっている。しかし末娘はすぐに身体をさがし集めて、頭、胴体、腕、足と、ちゃんと並べなおした」となる。そして、その直後に「そして、全部そろうと」が加えられ、姉たちが生き返るところには「目をあけて」が入る。さらに、最後の文も加筆され、「そこで、娘たちは大喜びして、キスしあい、抱きあった。けれども、末娘は姉たちを連れだして隠した」となる。

G二のテクストは、K一（二五）、K二（三三）、K三（三六）、K四（三九）と保持される。G三（三七）で冒頭の文が少し変更され、それからK六（四四）まで変わらない。K七（四七）でまた僅かに変更される。続くK八（五〇）でも変更がある。最後の文が「どんなに娘たちは大喜びして、キスしあい、抱きあったことか！」と感嘆文になり、「それから、末娘はふたりの姉たちを連れだして隠した」となる。ところが、G六（五〇）では、この部分は異なっている。K八のような感嘆文ではなく、おそらくK七から引き継いだ「そこで、娘たちは大喜びして、キスしあい、抱きあった」であり、「それから、末娘はふたりの姉たちを連れだして隠した」は削除されている。さらに、G六では冒頭の文に加筆があり、「ふたりの愛する姉が惨めに殺され、切り刻まれて、そこの盥の中に横たわっている」となっている。K九（五三）は、一か所の変更を除いてK八と同文であり、K一〇（五八）はK九と同文。G七（五七）は、K九から引き継いだ変更を除いてG六と同文。結局この段落でも、G七とK一〇は異なっていることになる。

［第一〇段落］

G一（一二）「魔術師は戻ってきて、卵に血がついていないのを見ると、末娘に自分の花嫁になってくれと頼んだ。末娘は、いいわ、でもまず、かごに金貨をいっぱいつめて、私の両親に担いでいってちょうだい、その間に私は、結婚式の準備をしておくわ、と言った」

簡潔なG一のテクストは、G二（一九）で加筆や書き換えがされ、わかりやすく語られるようになる。冒頭の文は加筆されて「魔術師は戻ってくると、鍵と卵を返せと言った。そして、卵に血がついていないのを見ると」となる。また、間接話法は直接話法に書き直され、魔術師と末娘の会話となり、魔術師のせりふには「おまえは試験に合格した」が書き加えられる。G二のテクストは、K一（二五）を経て、K二（三三）でいくらか変更される。たとえば、冒頭の文は「魔術師は到着時に鍵と卵を返せと言った」となる。接続詞を使った副文が前置詞句に書き換えられ、文章は整理されるが、書きことばの表現になっている。このテクストがほとんど変わらず、K七（四七）、そしてK八（五〇）に至る。

G六（五〇）でまた変更される。たとえば、「おまえは試験に合格した。おまえをわしの花嫁にしてやろう」という魔術師のせりふに「そして、おまえが望むことをしてやろう」という文が追加される。それに対する末娘の答え「いいわ」は、文語的なことばに変わる。K九（五三）はG六の変更を引き継いでいるが、追加された魔術師のせりふは姿を消し、かわって「ところが、魔術師はもう末娘をどうすることもできず、末娘がしてくれということをしなければならなかった」という地の文になり、魔術師が末娘に従う理由が説明される。K一〇（五八）はK九と同文。けれどもG七（五七）は、前半はG六と同文だが、後半はK九とほぼ同じである。それゆえ、G七とK一〇は異なっていることになる。

［第一一段落］

G一（一二）「それから、末娘は姉たちにむかって、うちから助けをよこしてちょうだいと言って、姉たちをかごに押し込み、その上に金貨をたくさんつめこんだ。『さあ、これを担いでいってちょうだい。でも、途中で休んだりしてはだめよ。そんなことをしても、この板の隙間から見ていますからね』」

この簡単なテクストは、G二（一九）で具体的になる。末娘が姉たちを隠しておいた小部屋へ行き「さあ、お姉さんたちを助けてあげるから、うちに着いたら助けを呼んでね」と話したこと、姉たちをかごに入れ「姉たちが見えないように」金貨をつめたこと、それから魔術師を呼び入れたことが加筆される。この加筆によって、G一でははっきりしなかった登場人物の位置関係が明らかになる。また、末娘のせりふもいくらか変更され、最後は「この窓から見て気をつけていますからね」となる。

K一（二五）はG二と同文。K二（三三）でさらに加筆がある。末娘のせりふが「さあ、お姉さんたちを助けてあげられる時が来ましたよ。あの悪者が自分でお姉さんたちを運んでいくことにするの」と説明的になり、末娘に魔術師のことを「悪者」と言わせている。その後、このテクストはK八（五〇）までほとんど変更されずに保たれる。けれども、G六（五〇）でまた少し書き換えられる。たとえば、冒頭の文は「それから、末

娘は小部屋に隠しておいた姉たちのところへ駆けつけ、言った『お姉さんたちを助けてあげられる時よ』」となる。K九（五三）はK八とほぼ同じだが、動詞がひとつ変更される。K一〇（五八）はK九と同文。G七（五七）はG六とほぼ同じだが、K九での動詞の変更は採り入れられている。よって、G七とK一〇のテクストは同一ではない。

［第一二段落］

G一（一二）「魔術師は、かごを背中に担いででかけていった。だが、かごはあまりに重くて、押し潰されそうだった。そこで、しばらく休もうとしたが、たちまち、かごの中から声がした『私は板の隙間から見ているのよ。休んでいるわね。さっさと歩きなさい！』すると魔術師は、花嫁が叫んでいるのだと思って歩きつづけた。」

G二（一九）でやはりいくらか変更・加筆がある。たとえば、魔術師が重いかごを担いでいくところには「汗が額をつたって流れた」という状況描写が加えられている。G二のテクストは、K一（二五）を経て、K二（三三）で少し変更されると、それ以降ほとんど変わらずにK七（四七）、K八（五〇）に至る。しかし、G六（五〇）でまた少し変更される。「かごはあまりに重くて」が「かごがあまりに重く押しつけ」となり、K八にはあった「魔術師は押し潰されてしまうとおそれた」は削除される。K九（五三）はK八のテクストを引き継いでいるが、魔術師が休もうとするところに「腰をおろして」と魔術師の行為がひとつ加わる。K一〇（五八）はK九と同一。G七（五七）はG六のテクストを引き継いでいるが、K九でなされた加筆も採り入れているので、G七とK一〇は同一ではない。

［第一三段落］

G一（一二）「休もうとするたびに、いつもそういう声がするので、魔術師は歩き続けなければならなかった」

G二（一九）で加筆され膨らむ。「しばらくして、また腰をおろそうとしたが、すぐに声がした『私は窓から見ているのよ。休んでいるわね。さっさと歩きなさい！』立ち止まろうとするたびに、声がするので、魔術師は歩き続けなければならなかった。そして、息を切らして金貨とふたりの娘が入ったかごを両親の家に運んだ」

このテクストは、K一（二五）、K二（三三）でそれぞれ僅かに変更されるが、その後はK七（四七）まで変わらない。K八（五〇）でまた少し変更され、たとえば、最後の文は「しまいには、すっかり息を切らして金貨とふたりの娘が入ったかごを両親の家に運んだ」になる。この変更はG六（五〇）に採り入れられているが、G六ではさらに副詞が書き換えられ「すっかり息を切らして」が「うめきながら息を切らして」となっている。K九（五三）は、冒頭の副詞「しばらくして」が「もう一度」にかわる以外は、K八と同文。K一〇（五八）はK九と同文。G七（五七）は、K九での副詞の変更は受けているものの、G六とほぼ同文。つまりこの段落も、G七とK一〇は同一でな

いことになる。

［第一四段落］

G一（一二）「いっぽう、魔術師の住処では、花嫁がしゃれこうべをひとつ持ってきて、それを飾りつけ、屋根裏部屋の窓際に置いた。それから、魔術師の友人たちを結婚式に招待した。それがすむと、末娘は蜂蜜の入った樽に身体をつけ、羽ぶとんを切り開いて、羽の中で転がりまわった。それで、誰にも末娘とはわからないような、不思議な姿になった」

G二（一九）で加筆・変更される。冒頭に「結婚式の宴会の準備をした」と花嫁である末娘の行為がひとつ加わる。そして、しゃれこうべに「歯をむきだして笑っているような」という修飾語を付け加え、屋根裏部屋の窓際に持っていって「そこから外をながめさせた」。最後の文も多少変更され、「その中で転がりまわった。それで、不思議な鳥のような姿になって、誰も末娘だとわからなかった」となる。題名でもある「フィッチャーの鳥」が第一五、一六段落で登場するので、「不思議な鳥のような姿」と変更したのだろう。

このテクストは、K二（三三）での僅かな変更を経て、K八（五〇）まで保たれる。ところが、G六（五〇）で変更がある。「魔術師の友人たちを結婚式に招待した」という文を前に置いて、「いっぽう、魔術師の住処では、花嫁が結婚式の宴会の準備をし、魔術師の友人たちを結婚式に招待した。それから、歯をむきだして笑っているようなしゃれこうべをひとつ持ってきて」とする。さらに「それを飾りつけ花輪をかぶせて」と花輪をかぶせたことを加えている。G七（五七）はG六と同文。K九（五三）とK一〇（五八）はK八と同文なので、G七とK一〇は同じではない。

［第一五段落］

G一（一二）「そういう姿で、末娘はでかけていった。まもなく、お客たちに出会った。お客たちが、末娘にこうきいた『フィッチャーの鳥さん！どこから来たんだい！』『フィッツェ・フィッチャーの家からさ』『若い花嫁はなにしてる？』『下から上まで家を掃き清めて、屋根裏部屋の窓からのぞいてるよ』」

G二（一九）で、冒頭部分が「そこで、末娘は住処から出ていった。途中で結婚式のお客たちに出会った」と変更されると、この段落は以降、G七（五七）およびK一〇（五八）まで同文。

［第一六段落］

G一（一二）「そのうちに、戻ってきた花婿にも出会った。『フィッチャーの鳥さん！どこから来たんだい！』『フィッツェ・フィッチャーの家からさ』『わしの若い花嫁はなにしてる？』『下から上まで家を掃き清めて、屋根裏部屋の窓からのぞいてるよ』花婿は見あげ、きれいに飾られたしゃれこうべが上にあるのが見えると、自分の花嫁だと思って、あいさつした」

G二（一九）でいくらか加筆・変更がされる。韻文の会話の直前に「花婿もきいた」が入り、会話の後は「花婿が見あげると、きれいに飾られたしゃれこうべが見えた。それで、自分の花嫁

だと思って、うなずいてみせ、親しげにあいさつした」となる。以降このテクストは、K八（五〇）まで、そして続くK九（五三）、K一〇（五八）でも変わらず保たれる。しかし、G六（五〇）においては、冒頭の文が書き換えられて「しまいに、ゆっくり歩いて戻ってきた花婿に出会った。花婿もほかのお客たちと同じようにきいた」となる。G六のテクストはG七（五七）に引き継がれる。

［第一七段落］

G一（一二）「ところが、花婿が住処に入り、友人たちも皆入ったときに、姉たちがよこした救助隊がやってきて、魔術師の住処をしめて、火をつけた。それで、誰も外へ出られずに、皆焼け死んでしまった」。G二（一九）で変更されて次のようになる。「ところが、花婿がお客たちと一緒に住処に入ったときに、姉たちの救助隊がやってきて、誰も逃げられないように、魔術師の住処の戸口を全部しめて、火をつけた。それで、魔術師は仲間のならず者たちと一緒に焼け死んでしまった」

このテクストは、K二（三三）での僅かな変更を経て、K七（四七）まで保たれる。K八（五〇）で接続詞がひとつ削除され、このテクストが、K九（五三）、K一〇（五八）に引き継がれる。ところが、G六（五〇）においては、「姉たちの救助隊がやってきた」が「救助のために送られた、花嫁の兄弟や親戚が着いた」と書き換えられている。G七（五七）はG六と同文なので、G七とK一〇はここでも異なっている。

結論

以上、段落ごとにみてきたが、「フィッチャーの鳥」全体のテクスト変遷は図に示したようになる。図においては、「→」はその方向へ変移、「=」は同一、「≠」は非同一、「*」は特に加筆がめだつ版を示している。

G一（一二）は非常に簡潔である。このテクストが、G二（一九）で全体に渡って加筆・改筆され、具体的に語られるようになる。これは、レレケが「一九年版においてグリムのメルヒェンのスタイルがはじめて獲得された」[7]と述べているとおりであるし、小澤の分析によっても明らかにされている。[8] たとえば、第一一段落では、登場人物の位置関係が明らかになる加筆がされるし、第一六、一〇、一一段落では、G一で間接話法であったところが直接話法に書き直されている。G二においては、間接話法を直接話法に改める傾向があることは以前確認したが、[9] ここでも同様の変更がされている。一方、第五及び第九段落における語り手の登場、第六段落の魔術師の恐ろしさを強調する描写、第一二段落の「汗が額をつたって流れた」という描写にみられるように、説明や状況描写の加

筆もみられ、すでに口伝えの昔話から離れていく傾向が認められる。

G二のテクストは、僅かな変更を除いて、ほとんど変わらずにK一（二五）に引き継がれる。K二（三三）でいくらか変更がある。たとえば、第二段落で森につけられた「暗い」という形容詞、第三及び第一〇段落では書きことばに変更された表現が目につく。また、第一一段落では末娘のせりふが説明的になったうえ、魔術師を「悪者」としている。

K三（三六）、K四（三九）は、K二と同一。K四の前後に出版されたG三（三七）とG四（四〇）においても、それぞれ僅かな変更が認められるが、この変更はK四には無関係である。G五（四三）はG四と同一。K六（四四）はG五とほぼ同一。

K七（四七）でいくらか変更がされ、続くK八（五〇）でも多少の変更がみられる。興味深いのは、K八独自の変更が数か所あることである。たとえば、第八段落においては、末娘が「卵を箱に入れて、その箱に鍵をかけ」たとしている。

K八と同年に出版されたG六（五〇）において、いくつか注目すべき加筆がある。第七段落では、二番目の娘が「好奇心にそそのかされて」部屋を開け、第九段落では、ふたりの姉が「切り刻まれて」おり、第一四段落では、末娘がしゃれこうべに「花輪をかぶせ」、第一七段落では「救助のために送られた、花嫁の兄弟や親戚が」着く。これらは、口伝えの昔話には本来属さない、登場人物の感情や状況描写あるいは説明である。昔話の登場者は内面的世界や周囲の世界をもたない図形である[10]という、昔話の特質からははずれた加筆である。G六には、K七（四七）から引き継いだとみられる表現と、K八（五〇）から引き継いだとみられる表現の両者が認められる。このことから、同年に出されたG六とK八については、K八の方がG六より先に改訂されたのではないかと推測できる。

しかし、この事例をもって、K八がG六よりも先に改訂されたと決めることはできない。これまでの調査結果によると、「灰かぶり」、「赤ずきん」、「貧しい粉屋の小僧と猫」については、K八がG六より先に改訂されたのではないかと考えられるが、「いばら姫」については、逆にG六がK八よりも先に改訂された可能性を認めることができるからである[11]。

続くK九（五三）において、いくつかの段落にめだった加筆と改筆がある。第四段落は、部屋の豪華な様子、「好奇心にかられて落ち着かなくなった」娘、娘が鍵で部屋を開ける様子が加筆されて膨らむ。第五段落では「木の台があり、その上にはぴかぴか光る斧が載っていた」と殺害道具が加えられ、それを受けた第六段落では、魔術師が「娘を突き倒し、髪をもって引きずり、娘の頭を台の上で切り落とし」と、魔術師の行為がより乱暴に書き換えられている。また、第一〇段落には、魔術師が末娘に従わなければならない理由が加筆される。つまりK九では、登場人物の感情、状況描写や説明、魔

術師の恐ろしさを強調する描写がさらに増えていることがわかる。K九には、K八（五〇）から引き継いだとみられる表現と、G六（五〇）から引き継いだとみられる表現の両者が認められる。

G七（五七）においてもいくらか変更がなされるが、G七には、G六（五〇）とK九（五三）両者から引き継いだとみられる表現や変更がみられる。K一〇（五八）はK九と同一である。よって、GとKそれぞれの最終版である、G七とK一〇は同一ではない。

この話の結末部である第一四段落から第一七段落は、G二以降あまり変更がない。つまり、この話は、発端部と展開部に主に手が加えられているといえる。また、第一五及び第一六段落においては、韻文の会話があらわれるが、これらは全版を通して変わらない。昔話における韻文は、変わりにくい部分であり、グリムも変更を加えなかった。このことは、「灰かぶり」や「赤ずきん」でも確認されている。

全体を通してみてみると、「フィッチャーの鳥」のテクストはG二（一九）で整えられ、K二（三三）とK八（五〇）でいくらか注目すべき変更が加えられ、G六（五〇）そして特にK九（五三）でめだった改筆がされたということができる。一八五三年には、ヴィルヘルム・グリムがすでにベルリン大学の教壇を去っていたことを考えると、G二以降あまり手を加えなかった話に注目し、「フィッチャーの鳥」を改筆したのかもしれない。

以上の結果から、「フィッチャーの鳥」のテクスト変遷は、調査済みの四話の結果とほぼ共通することがわかる。すなわち、

①テクストはG二（一九）で整えられ、その後二回、めだった加筆や改筆がされている。[12]「フィッチャーの鳥」がほかの話と異なるのは、G六（五〇）とK九（五三）というように、後の版になってからめだった改訂がされていることである。

②後の版にいくほど、口伝えの話には本来みられない表現や描写、たとえば、敵対者の悪さや恐ろしさを強調する描写、合理的説明、状況描写が増えていく。

③G四（四〇）とG五（四三）のテクスト、また、K九（五三）とK一〇（五八）のテクストは同一である。

④同年に出版されたG六（五〇）とK八（五〇）のテクストは同一ではなく、また、『童話集』『選集』の最終版である、G七（五七）とK一〇（五八）のテクストも同一ではない。

しかし、この結果がどの話にも有効であるとは限らない。たとえば、すでに大体調査が済んだ「蛇の話」（KHM一〇五／I）では、G四とG五のテクストは同一ではない。グリム童話の『童話集』『選集』におけるテクスト変遷を明らかにするためには、個々の話を調査しなければならない理由がここにある。

注

(1)『グリム童話選集』については、間宮、一九九四：七九－九二を参照。

(2) Mamiya, 1999 : 52-63、間宮、二〇〇二a：二九－四三、二〇〇二b：八五－一〇一、二〇〇三：一－一〇。

(3) Rölleke, 1983 : 461-462, Ders., 1985 : 1217-1218, Uther, 1996 : 92-94.

(4) 使用テクストについては、(1)(2)であげた論文を参照。『選集』第四版（一八三九）及び第七版（一八四七）については、それぞれ二〇〇〇年と二〇〇一年に、カッセルのグリム兄弟博物館及びニューヨーク公立図書館より写しを入手した。第五版（一八四一）の所在は、現在わかっていない。

(5) 小澤、一九九二・一九九六・一九九九を参照。

(6) ブルームとレレケによれば、「おまえが欲しいと思うものは…」という慣用的な表現は、「黄金の子どもたち」（KHM八五）のG一（二二）に初出し、それをもとに「フィッチャーの鳥」と「幸せハンス」（KHM八三）にもG二（一九）から採用されたという。Bluhm u. Rölleke, 1997 : 81.

(7) Rölleke, [5]1990 : 525.

(8)(5)に同じ。

(9) 間宮、一九九八：一－三七、一九九九：一－三一。

(10) 昔話の文芸的特質としての平面性については、Lüthi, [8]1985 : 13-24.

(11)(2)に同じ。

(12) ただし、これは「貧しい粉屋の小僧と猫」には該当しない。間宮、二〇〇三。

参考文献

小澤俊夫『グリム童話の誕生　聞くメルヒェンから読むメルヒェンへ』一九九二　朝日新聞社

――――『「グリム童話」を読む』一九九六　岩波書店

――――『グリム童話考』一九九九　講談社学術文庫

間宮史子「Kleine Ausgabe der Kinder- und Hausmärchen―その成り立ち、構成、特徴―」『Rhodus. Zeitschrift für Germanistik』一〇　一九九四

――――「『グリム童話集』第一巻初版本（一八一二年）の研究」『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』Ⅱ　一九九八

――――「『グリム童話集』第二巻初版本（一八一五年）の研究」『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』Ⅲ　一九九九

――――「『灰かぶり』のテクスト変遷―『グリム童話集』『グリム童話選集』のテクスト分析―」『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』Ⅵ　二〇〇二（二〇〇二a）

――――「『いばら姫』のテクスト変遷―『グリム童話集』『グリム童話選集』のテクスト分析―」小澤俊夫教授古稀記念論

文集編集委員会編『昔話研究の地平　小澤俊夫教授古稀記念論文集』二〇〇二（二〇〇二b）
――――「『貧しい粉屋の小僧と猫』のテクスト変遷―『グリム童話集』『グリム童話選集』のテクスト分析―」『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』Ⅶ　二〇〇三

Bluhm, Lothar u. Rölleke, Heinz: „Redensarten des Volkes, auf die ich immer horche" : Märchen – Sprichwort – Redensart; zur volkspoetischen Ausgestaltung der Kinder- und Hausmärchen durch die Brüder Grimm. Stuttgart u. Leipzig (Hirzel) 1997.

Lüthi, Max: Das europäische Volksmärchen. Form und Wesen. Tübingen (Francke) [8]1985.

Mamiya, Fumiko: Textveränderungen der Kleinen Ausgabe der Kinder- und Hausmärchen (KHM) der Brüder Grimm. Rotkäppchen (KHM 26). In: Doitsu Bungaku, 102 (1999), S. 52-63.

Rölleke, Heinz: Nachweise. In: Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Hrsg. von Heinz Rölleke. Stuttgart (Reclam) 1983. Bd. 3, S. 441-543.

Ders.: Kommentar. In: Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Vollständige Ausgabe auf der Grundlage der dritten Auflage (1837). Hrsg. von Heinz Rölleke. Frankfurt a. M. (Deutscher Klassiker) 1985, S.1149-1285.

Ders.: Zur Biographie der Grimmschen Märchen. In: Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Nach der zweiten vermehrten und verbesserten Auflage von 1819, textkritisch revidiert und mit einer Biographie der Grimmschen Märchen versehen. Hrsg. von Heinz Rölleke. München (Diederichs) [5]1990, S. 521-578.

Uther, Hans-Jörg: Nachweise und Kommentare. In: Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Nach der Großen Ausgabe von 1857. Hrsg. von Hans-Jörg Uther. München (Diederichs) 1996. Bd.4, S. 7-380.

（まみや・ふみこ／白百合女子大学）